

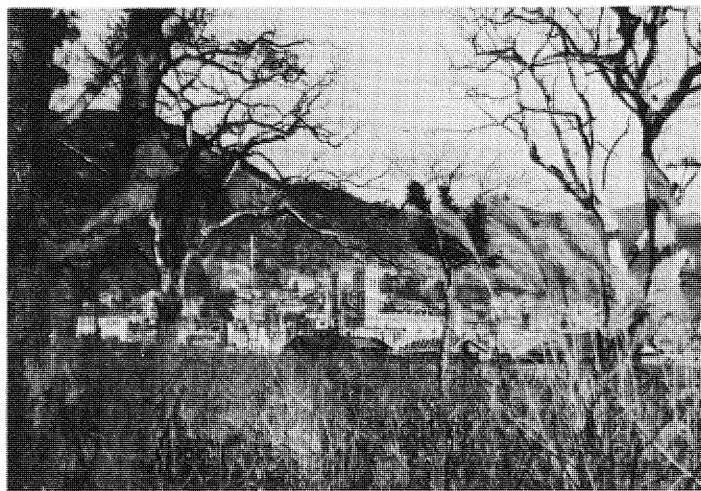
生田森とセンター街附近今昔

福田 義文

汐なれし生田の森の桜花春の千鳥のなきてかよへる

秋成（あきなり）

平安朝から江戸期にかけての生田森から海岸に通ずる馬場先は、名作「雨月物語」の作家・上田秋成が詠んだような、まことに美しい田園風景で、民謡にも「婆々ジャ、ババ（馬場）ジャ



焼けてしまった生田森からは山手の教会がついそこに
見えた（昭和21年早春）

ト云ハンスケレド、生田ノババニハ花ガ咲ク"などがある。この附近が、市街地的な発展を遂げたのは神戸開港後で、しかも明治三十年以後。私が、大阪天満から生田宮に転動した昭和十三年（阪神

風水害）ころは、東門筋は古道具屋が多く、生田前筋から三宮神社附近は、色とりどりの商いの店と色街があった。建物

生田の池は防火用水の役目を持っているが大空襲には間に合わなかった。



も木造二階建てで、通行者も和服がほとんど。モダンボーイが出現したのもこの時代。その中、太平洋戦争の大きな渦の中に突入。遂に昭和二十年六月五日むなしい焼土と化した。戦いの烈しき跡は残りけり焼き枯らしたる楠の大樹に

関（たけし）

この歌は、言語学者・北里関が、焼けただれた森に寄せられた、かなしい歌。

「焼土から立ちあがる」と、言う詞さながらに、枯死したと思った生田森も芽をふき出し、宮前のセンター街附近も、神戸市再建復興の先がけとなって繁栄した。今、このあたりは「世界の衣・食が、ここに集る」の観がある。私は、限りなき未来を夢みながら、来し方四十年余の激しかった歴史の悲しみと、喜びを回想している。

（生田神社宮司）